

揖保川流域委員会

第3回 流域社会分科会 議事録（概要）

日 時：平成15年3月11日（火）14時～17時

場 所：龍野市 西はりま青少年館 ホール

出席者：委員8名、河川管理者2名、傍聴者22名

1. 分科会からの提言に盛り込む内容について

まとめ役の田原委員より「提言に向けての議論」について資料説明が行われ、分科会からの提言について討議されました。

討議の結果、これまでの議論を分科会からの提言としてまとめ、次回の委員会で報告することとなりました。まとめは田原委員と他の委員が分担して作成することとなりました。

委員からの主な発言

淀川ではダムをつくるのをやめるといふ、利根川では歴史的に川を利用してこられた、また紀の川には30cmのアユがいるという話が、テレビで最近取り上げられた。他の川では非常に力を入れておられるので、揖保川でも力を入れなければならないと思った。

現在、一宮町の嶋田地区で堤防の工事が行われているが、ここでは神社の石垣やケヤキの木を一部そのまま残して工事されている。こういうことはとても大切に景観資源や自然資源は残していただきたい。また、これから整備される河川敷に地元の人たちと触れ合える場ができればいいと思った。その工事の中で小さなところはコンクリートで固められており安全な工法なのかなと思ったが、工事というのは最終的にはコンクリートでまとめなければいけないのかな、と思った。

山崎の近辺では川は低いところを流れているため、大水が出ても深いところまで浸かってしまうことはない。ところが新宮町吉島の近所では、川底より家のある方が低いかもしれず、もっと下流へ下がると川が非常に高くなっており、文化財のようなものはあまり残せないのではないかと思った。そういうことから考えて、川の整備の際残せるものが地域によって違うのではないかと思う。

揖保川の歴史・文化についてすべての人々に関心を持ってもらいたいが、人の毎日の生活は多忙で、結果的に歴史離れをしている生き方が普通になっている。人々の間にどう制度づけ、システム化できるかがポイントとなる。その中で、学校の総合学習に歴史の部分、環境教育の部分を位置づけていくことが期待でき、この部分と関連する問題提起ができればよい。さらに、流域内には揖保川と関わる中学、高校があり、学校の全員集合といった具体的な提案ができれば、この部分の展開ができるかもしれない。

国には100年に1度の洪水に耐えられる川をつくるという基本的な考え方があり、その場合、これだけ堤防が高くなるという説明があったが、そうすれば物理的に川から人が遠ざかっていくことにならないか。

加古川では、県管理の支流については、30年に一度と言っていた。支流がそうなら本川もそれでいいのではないか。

洪水に対して揖保川の本川だけに負担させていては、川は当然悲鳴を上げる。だとすれば揖保川流域の町のつくり方に関わってくる。駐車場も今はアスファルトだし、庭にコンクリートを打っている家もあり、雨が降ればすぐに揖保川に行き、一気に海まで流すことになる。揖保川を通じて地域の町のつくり方まで提言すべきではないかと思う。スイス、ドイツでは、雨水排

水のための下水管を掘り起こし、そこにかつてのせせらぎを再生したり、面的な取り組みとして川づくりをやっている。この流域社会分科会は、雨水を利用し、さらに地下へ浸透するような地域の水の循環システムも提言していかなければならないのではないかと。揖保川本川と支流を含めた水の道ネットワークといったところまで提言すべきではないか。

「人が関われる川づくり」がエンドレスに行われること。これ(委員会)が機会となってそういう仕組みづくりができないか。また、上・中・下流には利害が一致することもあれば相反することもあり、絶えず話し合いながら全体のバランスを考えることが大事である。揖保川の川づくりは、上・中・下流で非常によく話し合いながら行われているということが一つの個性になれば素晴らしいのではないかと。

千種川では「千種川圏域づくり委員会」が設立されているが、川だけでなく、山・田んぼ・海・森のすべてを一体のものとして考えていく上・中・下流のネットワークのような組織がつくられている。人と人のつながりは大切で、人と川とのつながりは、人と人の上・中・下流のつながりによって生まれてくるものではないか。こういう観点から、揖保川流域のネットワークのような組織・仕組み・システムを考えるべきで、流域住民自らの手でネットワークを組んでいけるような仕組みができないか。

子供会単位、学校単位、学年単位、自治会単位などで川や、特に水生生物との関わりが持たれているが、実際に関わってみて、川へ子どもを連れて行く時、川に下りる場所がないということに困る。瀬があり、淵があり、河原があり、土手があるといった河川公園ができれば、そこで学習ができるので、教育の中できちんと位置づけることができるのではないかと。

明治以来の戦前では、村や地域の中心的な役割を果たしたのが鎮守の森であった。現代では鎮守の森ではなく、川がそのキーワードになるのではないかと。川がよみがえるための問題提起を揖保川を媒介として行い、例えば、川が生き残る、川がよみがえる提言を年に1度ずつ全国に募集してみてもよい。あるべき望ましい揖保川の復権のための取り組みを全国に呼びかけてみるということが、これからは求められているかもしれない。

以前は農業用水の取水時期にだけ水を堰き止め、その時期を過ぎればそれを外さなければならぬということがあったが、現在はそういう堰ではなくなっている。生活レベルで河川を管理していた人たちが今は不在になっているということであり、こういう現実の話から出発しなければならぬ。

100年に1回の洪水に対応するという考え方の現在の計画では、今後どれぐらいの区間で整備をしていかなければならないのか。

(河川管理者による回答)現在、河口から22kmよりも下流の区間では、53%ぐらいの整備が完了しており、これから整備しなければならないところが半分近く残っている。22kmから上流部ではさらに流下能力の不足しているところが多くなる。流域委員会では今後20~30年間で行う整備の計画を議論していただいております、その整備には限界があり、20~30年間の目標を設定し整備内容を決めていくことだと思っている。

歴史・文化を保存しよう、人との関わりを持っていくといくら言っても、川の整備のあり方を考え直さないと保存できない。工夫して何とか保存できた箇所もあるが、そうはいかない箇所も当然あり、そのあたりを確認してすすめないと、いくら歴史・文化を大切にしますと言ったところで現実と離れすぎてしまうことになる。

現在は、流域下水道により生活排水は最下流部で処理し、海に放流している。「下水道は水資源」とも言え、家庭で使った水は地域できれいにして川に返していくことをしないと川の水量は保てなくなる。地域型の下水道による水循環をつくっていくことを提言したい。

宍粟郡では「森林王国」として山に非常に力を入れている。山の間伐や枝打ちへの補助もあり、降った雨をすぐに川に流さないで、山でとどめようと努力していけば揖保川の水がなくなるこ

とはないと思う。

揖保川流域には畳堤があるが、最近では防水パネルなどがあるので、こういった素材に切り替えていく時期ではないかとも思う。

畳堤における地域の人と川との関わり、システムはずばらしいと思う。畳堤の持つソフト的な意味合いは継続していかなければならない。

まちづくりや都市計画においても産業の視点が欠けることが多い。揖保川全体を観光資源にするような、産業というものを意識していった方がよい。

龍野の畳堤は、地域住民の皆さんが地域の手で川を守っていかうと努力されているものである。今の時代にはないことかもしれないが、家から畳を持って行って川を守るといった粋な心意気を理解してほしい。

地方分権一括法が成立し、環境関連法案もさまざまな施策体系の変更が行われているが、水質汚濁防止法の事務区分では国の直接執行事務の占める割合が高い。水の汚れに市町村が関与できる余地が少なくなることは、川が住民にとって遠くなることになり、市町村の裁量権をもう少し保障することはできないか。

「川の駅」のような地域おこしにより、子どもも大人も川に入って親しんでいく。このことが川をきれいにし、川に対する意識が高まるといったことを考えて議論をすすめていきたい。

揖保川の大きな特徴のひとつとして、伏流水が地場産業を育てたということを忘れてはいけない。しょうゆ、そうめんなどの地場産業と地下水質・地下水量との関係は非常に密接であり、新たな産業おこしという目線と同時に、伝統的な産業や地場産業に配慮するという目線を折り込んでほしい。

市民の目線、市民の生活に根ざすという観点から揖保川全体の整備計画が問われていると思う。

2. 住民意見の把握について

情報交流分科会が中心になって検討をすすめている住民意見の把握(「(仮称)流域の声をうかがう会」)の内容について、意見が出されました。

委員からの主な発言

「流域の声をうかがう会」よりも、みんなで揖保川について話し合おうというような楽しいイメージのネーミングの方がよいのではないか。

意見募集のチラシはもっとイラストを入れるなどして楽しい雰囲気をつくり、川に対する意識を持っている人だけでなく、意識を持っていない人もおもしろそうだから行ってみようと思えるようなチラシづくりをした方がよい。

例えば、写真の得意な人、絵の得意な人、作文が得意な人が関わり、いろんな媒体で揖保川を表現してもらうのはどうか。

3. 傍聴者からの発言

1名の傍聴者から次のような発言がありました。

三川分派地区のところは昔は畑だったが、最近では畑として使われなくなり、木が大きくなり林になっている。この木は洪水の時の流水に悪影響があるのではないか。また、その近くにある堰で壊れたまま補修されていないものがあり、危険である。三川分派地区をどのように整備しようとしているのかを知りたい。